

第3次東日本大震災復興支援ボランティア 参加者の想い・感想



連 合 長 野

《目 次》

- P1～ 参加者名簿
- P2～ 行動スケジュール
- P7～ 参加者の感想
- P23 信濃毎日新聞の社説・記事より
- P24 追悼の歌・しあわせ運べるように
- P25～ 多賀城市社協DVDのメッセージより
- P27 あとがき

第3次復興支援ボランティアの参加者名簿

班		氏名	所属組織・組合名	
1	1	荻上 一敏	自治労長野県職員労組諏訪支部	
	2	山近 龍浩	自治労長野県職員労組下伊那支部	
	3	山村 徹	JAM平和時計労組	
	4	五十川 嘉一	JAM平和時計労組 ※副班長	
	5	勝野 正志	JAM多摩川精機労組	
	6	土屋 佳秀	電力総連中部電力労組伊那営業所支部	
	7	福士 恭平	電力総連中部電力労組伊那営業所支部	
	8	坂元 雄太郎	電力総連中部電力労組伊那営業所支部	
	9	安藤 智洋	電力総連中部電力労組伊那営業所支部	
	10	宇都宮 優	電力総連中部電力労組伊那営業所支部	
	11	三ツ井 翔太	電力総連中部電力労組伊那営業所支部	
	班	12	藤沢 義広	情報労連NTT労組諏訪分会
		13	宮崎 朋実	上伊那地協・自治労中川村職員労組
		14	片桐 開	上伊那地協・自治労中川村職員労組
		15	栗山 明	上伊那地協・自治労中川村職員労組
		16	宮嶋 秀志	飯田地協・自治労飯田市職員労組
		17	島岡 洋幸	飯田地協・自動車総連盟和産業労組 ※班長
2	18	青柳 建一	自治労長野県職員労組木曾支部	
	19	村田 吉弘	自治労長野県職員労組木曾支部	
	20	米山 幸良	自治労長野県職員労組木曾支部	
	21	高橋 恵子	自治労安曇野市職員労組 ※班長	
	22	小澤 祐子	自治労安曇野市職員労組	
	23	松尾 智光	電機連合本多通信工業労組松本支部 ※副班長	
	24	胡桃 昌二	電機連合本多通信工業労組松本支部	
	25	秋山 直美	UIゼンセン同盟片倉機器労組	
	26	後藤 利博	電力総連東京電力労組松本総支部	
	27	足利 雄太	電力総連東京電力労組松本総支部	
	28	上村 了一	電力総連東京電力労組松本総支部	
	班	29	国島 健也	電力総連東京電力労組松本総支部
		30	魚住 友紀	全労金長野県労働金庫労組
		31	成沢 勇次	連合長野事務局 ※事務局
3	32	徳武 秀明	電機連合太陽誘電モバイルテクノロジー労組	
	33	堀田 拓也	電機連合鈴木労組	
	34	坪井 博之	電機連合鈴木労組	
	35	金子 孝弘	JAMアピックヤマダ労組	
	36	須田 厚志	JAMアピックヤマダ労組	
	37	若月 一哲	電力総連中部電力労組長野支店支部	
	38	渡辺 茂男	サービス・流通連合西友労組中部支部 ※班長	
	39	岩崎 直一	JAMシチズンファインテックミヨタ労組 ※副班長	
	40	小林 秀樹	JAMシチズンファインテックミヨタ労組	
	41	林 健治	UIゼンセン同盟シナノケンシ労組	
	42	関 美菜穂	UIゼンセン同盟ツルヤユニオン	
	班	43	高橋 幸恵	東日本大震災支援長野県民本部
		44	根橋 美津人	連合長野事務局長 ※隊長
		45	徳武 淳	連合長野副事務局長 ※副隊長
		46	櫻田 豊三郎	連合長野組織アドバイザー
		47	戸井田 学久	連合長野事務局

第3次復興支援ボランティアの行動スケジュール

第1日目 3月9日(金)

- 3:50 諏訪(おぎのや諏訪店) 発
- 4:25 松本(松本合同庁舎前バス停) 発
- 5:20 長野(おぎのや長野店) 発
- 6:10 佐久(佐久乃おぎのや) 発
- 車中にて昼食
- 12:40 七ヶ浜町災害ボランティアセンター着
- 13:00 七ヶ浜町菖蒲田浜地区で草刈り清掃ボランティア作業



- 14:30 作業終了→七ヶ浜町災害ボランティアセンター(用具の清掃と片付け)
- 16:30 仙台市内ホテルパレス仙台とホテルパーク仙台Ⅱへ分宿
- 18:30 団結会

第2日目 3月10日(土)

- 8:45 ホテル発
- 9:30 七ヶ浜町災害ボランティアセンター着
- ※悪天候のためボランティア作業中止
- 10:00 朝の会



- 10:50 ボランティア座談会(10グループ毎) ※連合長野隊は⑤～⑧グループに参加



- 12:00 昼食休憩

13:00 「七ヶ浜町災害VCの一年」DVD鑑賞



14:30 横断幕にメッセージ記入



15:00 ボランティアセンター出発

16:00 ホテル着 (各自夕食)

第3日目 3月11日(日)

8:15 ホテル発

9:00 七ヶ浜町災害ボランティアセンター着

※3/11～「浜を元気に!七ヶ浜町復興支援ボランティアセンター」に名称変更



9:30 長電観光のもう1台（一般参加者）と出発



9:45 多聞山展望台

10:30 菖蒲田浜海岸で「慰霊の集い」（黙禱・献花・絆の種まき）





12 : 00 七ヶ浜町災害ボランティアセンター着、昼食
 13 : 00 七ヶ浜町災害ボランティアセンター発



14 : 46 仙台市宮城野区蒲生地区にて慰霊の黙禱



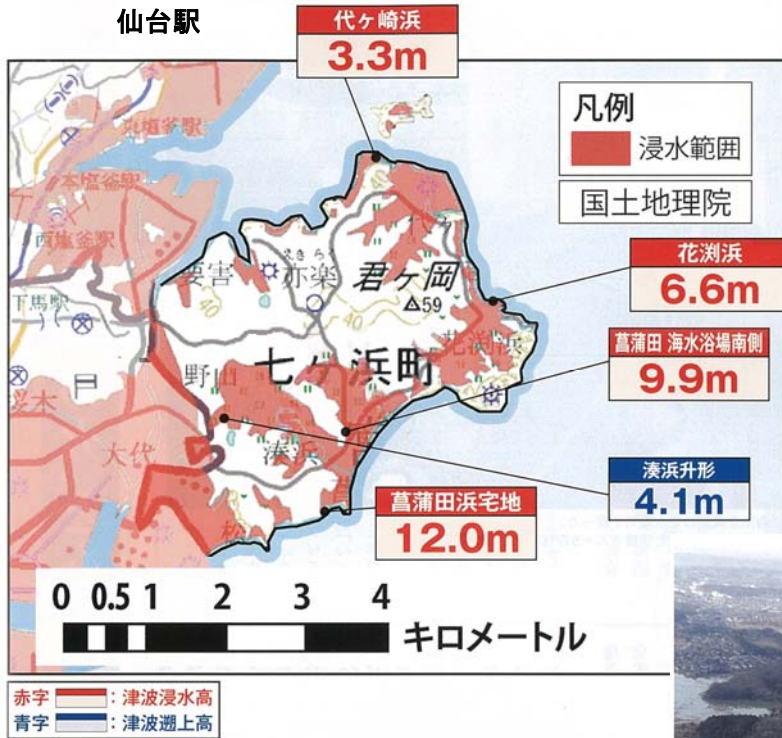
20 : 30 佐久乃おぎのや着
 23 : 00 おぎのや諏訪店着



七ヶ浜町菫蒲田浜で慰霊の集い

仙台市宮城野区蒲生で14:46黙祷

仙台駅



◎七ヶ浜町の被害状況

(2012年3月7日現在)

死者	72人
行方不明者	4人
全壊家屋	673棟
半壊家屋	635棟
一部損壊家屋	1,067棟



右下の菫蒲田海水浴場付近は、密集していた家屋が跡形もなくなった(七ヶ浜町提供)

第3次復興支援ボランティア参加者の感想

[自治労長野県職員労組諏訪支部・荻上 一敏]

東日本大震災からちょうど1年目、被災に遭われた方にとっては、長く苦悩に明け暮れた日々だったと思います。しかし、ニュース等でも福島原発以外津波による被害、被災者の取り扱いも少なくなり、私自身も余りに大震災のことは、風化し始めていました。

第3次ボランティア参加申込書を見て、あらためて思い起こさせてくれました。「私ができることは？役に立つのか？お邪魔にならないだろうか？」そんなことも思いめぐりましたが、それよりTVで見た津波の恐ろしさを、その傷跡を自分の目で見てみたい、その気持ちが強かったと思い参加させていただきました。

現地に入り、はじめて大震災の傷跡を見たときに言葉を失いました。

微力ながらガレキ除去のボランティアに参加して、あの惨状からよくここまで綺麗になったなと思いました。多くの方の手が入りここまでになったかと思うと、もっと早く参加できればと・・・

懸念であったお邪魔にならないかと思いましたが、VCスタッフの方々も明るく迎えていただき大変お世話になりました。みな若い人たちが多くに驚きました。しかも、テント等でボランティアをしているスタッフ、狭い生活空間の中でスタッフ同士の全国的な共同体ができていて、地元の方や行政も頼りにしているのだらうと思います。(笑顔や笑い声が絶えない明るいVCでした。)

災害ボランティアはほぼ終了し、これからは復興ボランティアとして活躍していくみたいで、また何かお手伝いできればと思います。

最終日、3月11日震災の時間に合せて参加者で黙祷させていただきました。

この貴重な3日間の体験を職場、家庭等で話し、この大震災の悲惨さと復興に取り組んでいる多くのボランティアの方々の活躍を伝えられたらと思います。

[長野県職員労組下伊那支部・山近 龍浩]

連合長野の第3次震災ボランティアに参加しました。

今回のツアーは、土日を使った日程で参加しやすくとても助かりました。震災からちょうど1周年というタイミングで実施されたこともあり、ボランティア活動自体はあまり出来ませんでした。大変貴重な経験をさせてもらいました。

ツアーに参加して感じたことは、被災地の復興は思ったほど進んでいないということです。地震で発生したガレキの横で子どもがサッカーをするような状況を早急に改善して欲しいです。災害からの復興が人ごとでなく、自分のことでもあると言った雰囲気作りがとても重要だと思いました。



ボランティアで出来ることは限られていますが、機会があればまた参加したいです。今回企画して頂いた連合長野事務局の皆さん、ありがとうございました。

[JAM甲信平和時計労組・山村 徹]

今回、初めて被災地でのボランティアに参加させていただきました。企画いただいた長電さん、
連合長野、ご理解いただいた職場に感謝します。



綺麗にした雑草地（1日目）

悪天候の為、体を使った活動自体は非常に少なくなりましたが、現地スタッフや他のボランティアグループの皆さんとの意見交換会を実施することができ、非常に多くのことを得られたと思います。

3月11日には、ご自宅が津波の被害に遭われたご家族が自宅跡地で献花を行っている場面に何度も直面し、改めて一致団結し、皆で復旧・復興に取り組む必要があると強く感じました。

[JAM甲信平和時計労組・五十川 嘉一]

被災地に入り、住宅基礎部分だけが残っている景色を目の当たりし、虚しさと津波の恐ろしさを感じました。またガレキの山が、至る所にうずたかく積み上げられている景色には驚き、これから更に復興を加速していくためには、スムーズなガレキの処理が必要不可欠であると実感しました。

さらに最終日に菖蒲田海岸で見た、生活用品や流されてきたゴミが、いまだに散乱している様子は車窓からでは分からない姿であり、これからこの地域が元の姿を取り戻すのに、どれだけの時間がかかるのだろうか？と考えさせられ、今後も継続的な活動の必要性を感じました。

今回、実質的なボランティア活動はあまり出来ませんでした。菖蒲田海岸で植えた種が大きく育ち、松林再生の力になってもらえればありがたいと思います。



ボランティアセンターにて



基礎部分だけ残った住宅跡地



松林再生に向けての種まき



被災した菖蒲田海岸

[JAM多摩川精機労組・勝野 正志]

ボランティアに関しては寄付金位しか協力できておらず、「少しでも直接被災者の方にお役に立ちたい」と日ごろから思っておりました。そんな中組合の方からボランティアのお誘いがあり今回参加させていただく事ができました。

実際に被災された景色が目に入ってきて、テレビでは見ていましたが、あまりにも悲惨な光景に目を背けてしまいました。

午後、土に埋もれた瓦やタイルの撤去、草刈などの作業を2時間程度させていただきました。短時間ではありましたが軽トラック4台ほど撤去することができました。



2日目は悪天候のため作業は中止になりましたが、ボランティアセンターでスタッフや現地の方、他県からの参加者を交えた座談会がありました。スタッフの方は「ボランティアの方の励ましの言葉が1番うれしかった」現地の方は「来ていただけるだけでもうれしい」との言葉が印象的でした。

3日目は3月11日と言う事で海岸で黙祷や献花をしました。

一人ずつ献花台に献花していくわけですが順番を待っている間、被災者がどれだけつらい思いをしたかと思うと涙があふれてきました。献花後は海岸に松の木が生えているのですが、松だけでは土壌が丈夫ではないと言う事で、松林の中にくるみやどんぐりの種をまきました。無事発芽して大きくなってくれると良いなと思いました。機会があれば子供と見に来たいです。

今回、実質2時間程度しか作業ができませんでした。もっと、もっと、お役に立ちたかったです。今後も少しでも自分にできる事があれば協力したい。

最後に、この3日間とても貴重な体験をさせていただき、連合長野、長電さんほんとうにありがとうございました。

[中部電力労組伊那営業所支部・土屋 佳秀] 「しあわせ運べるように」



3月11日(日)、今回のボランティア参加者と地元ボランティアスタッフの方々と、菖蒲田海岸にて合唱し、県下・黙祷をささげた。

私の思いは、みなで合唱したこの歌のとおりです。

この歌を、家族や仲間と歌い、思いを伝え共有して行きたいと思います。

七ヶ浜ボランティアセンターの高橋リーダーから教えていただいた「継続」が大事だという事、今の私には何ができるのか！を考える事を継続して行きます。

[中部電力労組伊那営業所支部・福士 恭平]

今回、被災地ボランティアに参加して素直に思ったことは、まだまだ復興には時間がかかると言うことです。

街の中からガレキは撤去され、なくなったように見えますが、至るところにガレキの山があり

ました。今TVでも報道されていますが、ガレキの受け入れ。なるべく早く長野県も受け入れを決定し、被災地のために協力していかないとと思いました。

そして被災地へ行きもう一つ思ったことは、被災地の方がとても明るく元気だということです。どの方の姿を見ても、いつも笑顔で辛そうな顔は一切していませんでした。皆さんとても強く、私も見習っていかないとと思いました。辛い時こそ笑顔で頑張りたいです。そしてこれからもボランティアに積極的に協力して行きたいです。

[中部電力労組伊那営業所支部・安藤 智洋] 「復興とは何か」

今回、復興支援ボランティアに参加させていただき、被災地の現状を見た中でまず思ったのは、確実に前に向かって進んでいるということです。

ボランティア活動と聞いていた私は、家屋のガレキ撤去のような作業を想像していましたが、一年が経ち、七ヶ浜町では、畑の耕作作業が主な活動とお聞きし、被災者の心のケアの段階まで復旧が進んでいるんだなと感じました。

ただ、仙台市内と海沿いの地域との復旧・復興の差は歴然です。仙台市内で食事をしていると、とても一年前に大震災の被害を被った場所とは思えない賑わいでした。被害の大きさの差もあるかもしれませんが、それ以上に復興への地域格差が大きいと感じました。

復興とは、一度衰退したことが元通りに復旧することです。口で復興と言う事は、簡単ですが、復興には多くの人材・資金・時間が必要で、何より地域住民の心の回復が大切です。

いつまでも、被災地のことを思い、また周りにも被災地について感心を持ってもらうことが今、私に出来る、最大のボランティアであると思いました。

[中部電力労組伊那営業所支部・宇都宮 優]

私が今回ボランティアに参加したのは、一年目という節目を迎えるにあたり、被災地の実状を体感したかったからでした。

昨年7月にも連合長野のボランティアに参加させて頂きましたが、見たことのない光景に大きなショックを覚えました。テレビの向こう側で、ある意味ショックを覚えました。テレビの向こう側で、ある意味非現実的なまま生活していたことに気付き、何かしなければと思いました。しかし、日々の生活に追われ、被災地のために私が行えることは、ボランティアに行くことで自分の価値観が変化したことを伝えることしか出来ませんでした。このまま一回だけで終わりたいという思いが強かっただけに、会社の同僚と参加できる機会を頂けたことに感謝します。

今回の復旧から復興へと次のステップへ踏み出した被災地の姿を見ることが出来ました。

私達が1人で出来ることは、ほんのわずかですが、これからも東北のことを常に想い、出来る事から少しずつ動いていこうと思います。

[中部電力労組伊那営業所支部・三ツ井 翔太] 「ボランティアを終えて」

今回は震災から一年の節目ということもあり、初めて参加させていただきました。

現地に着くまでは不安が大きかったのですが、七ヶ浜の皆さんが温かく迎えてくださり、三日間、とても気持ち良く作業ができました。

このボランティアで、復興のお手伝いはもちろん、被災され方々に少しでも元気を分けられたらと考えていましたが、七ヶ浜の方々の力強さに圧倒され、逆に元気を貰ってしまいました。

復興はまだまだ時間がかかりますが、その分、人と人の絆も強くなると思います。

少しずつ復興しながら絆を深めていき、前よりもっと元気な七ヶ浜町になる、そのお手伝いをこれからも続けていきたいと感じました。

[情報労連NTT労組諏訪分会・藤沢 義広]

震災から一年を前に「ボランティア募集」を知り、自身の退職記念にと参加させていただきました。

天候もありチョッピリのお手伝いとボランティアセンターの運営の学習、慰霊の三日間でしたが、今後活かすことができそうな貴重な体験をさせていただきました。

それにしても一瞬の晴れ間に見えた田んぼのガラスの破片。キラキラ光るおびただしい数。塩害もあるだろうけれどどうやって取り除くのか、人海戦術でも何人が必要で何年かかるのか？私には住宅や生活基盤の復興の大変さを象徴する光景に見え、改めて考えさせられました。

募金、物品購入、観光、ボランティア、など小さな力と時間ですが、お手伝いを継続して行きたいと考えております。

[上伊那地協自治労中川村職員労組・宮崎 朋実]

震災から一年を迎える被災地では、内陸部の復興は終わり、津波の爪痕が残る沿岸部との格差がとても大きいと感じた。

震災を受け、被災者のみならず日本国中の人々が、心に傷を負いました。義援金に限らず、何かしらの行動を起こしたいと思った人は多いと思います。しかし、何も出来ない自分に歯がゆい思いをしていることと思います。

震災から一年が経ち、被災地の状況を伝える報道は今後減るばかりだと思います。内陸部の復興は進んでも、沿岸部や原発の避難区域などは、周囲から完全に遮断され、忘れ去られた地域となることが、とても悲しいことです。

被災地や被災した人たちの事をいつまでも忘れない為に、旅で訪れる、物産品を買う、インターネットで情報を得るなど、関心を持って現在進行形の復興を共に歩む気持ちを持つことが、必要だと思います。



中川村職労から参加した右から宮崎・片桐・栗山さん

[上伊那地協自治労中川村職員労組・片桐 開]

この度は、連合長野の主催する第3次復興支援ボランティアに参加させていただき、ありがとうございました。

現地での作業は短い時間だったので被災地に貢献したという実感はありませんが、現地に行ったことで報道では伝えられることのない様々なことを感じ、被災地のことを「思う」きっかけになったことがおおきな成果でした。

積み上げられたがれきの問題、津波の被害を直接受けた地域と受けていない地域の格差の問題、

ボランティアセンターの苦勞など…深刻な問題をダイレクトに感じる事が出来ました。

震災から1年という節目でしたが、被災された方にとってそんなことは関係なく、現地では苦しい状況が続いていました。

少なくとも私のまわりだけでも、今回のボランティアで感じた想いを伝え、なんらかの形で継続的な支援を続けていこうと思います。

[上伊那地協自治労中川村職員労組・栗山 明]

今回、七ヶ浜町でのボランティアに参加させていただき、現地において、また地元に戻ってきたからも、様々な事に思いを巡らせる機会を多く持つこととなりました。

特にVCの高橋さんより、ご自分が七ヶ浜でボランティアをするに至った思いとして「義を見て為さざるは勇なきなり」という言葉を引用されたのを聞き、ボランティアに対して抱いていた胡散臭いイメージが晴れ晴れとしました。

正直に申し上げれば、これまで「ボランティアというもの」やボランティアに参加している人を「なんだか利己的だよな」と拗ねた目で見ているような気もしますが、初めて自分自身が参加させていただき、そもそもそんな小さい事はどうでもいいと思うようになりました。

ボランティアとは「ただの言葉」であり、本質はそのことを「行う」か「行わないか」だけではないかということ、そして近くや遠くの誰かのために自分が正義と感じたことを（相手の迷惑でない限り）勇気を持って行うということを自分の中の「ボランティア」にしようと思い至りました。

そういえばドングリなどを植えた菖蒲田浜、あれはいい浜ですね……。あの松林が再生していく様子を、子供達を連れて見に行きたいなと思っています。



菖蒲田浜の松林再生の思いを熱く語るVCの高橋さん

[飯田地協自治労飯田市職員労組・宮嶋 秀志]

この度は、良い機会を与えていただき本当にありがとうございました。

これまでボランティアを一度も参加したことがなかった私ですが、あのとてつもなく巨大な津波が引き起こした大災害の現状に大きな衝撃と悲しみを感じ、今まで、現地に行ってお手伝いしたいという思いをずっと抱いていました。

1年たってようやく行動に移せた訳ですが、被災地の1日でも早い復興を思えば、もっと早く行くべきではなかったかと後悔しています。

今回は、天候が悪く大したお手伝いができなかったのですが、是非もう一度行ってみたいと思っています。確かにもっと早く行くべきでしたが、被災地は復興に向けて歩み始めたばかりで、まだまだ多くの人の助けが必要です。

何か行動を起こしたいと思っている方は、一人でも多く是非現地へ行ってもらいたいと思います。東北の、日本の復興のためにお願いします。

[飯田地協自動車総連盟和産業労組・島岡 洋幸]

昨年、震災から3ヶ月後に連合本部のボランティア活動に参加し現地の悲惨な状況を見て、1年後の現状はどうなっているかを確認めたく今回のボランティアに参加しました。

七ヶ浜町へ向かう道中では、仙台港辺りは経済活動がされており復興をうかがわせました。瓦礫の撤去も進み、一見震災があった場所とは思えない程の見かけではありました。

しかし、塩害を受けた田んぼは整地されてはいるものの稲は育てられず、その土の中にはまだ、細かい瓦礫が埋まっている状況。津波の被害に会った沿岸部は、瓦礫の撤去は進んだものの家の土台はそのまま。

仙台市荒浜の荒涼とした景色は、復興のかけらさえ感じさせるものではありませんでした。



今回の参加者として、まだまだ援助の必要なこの状況を人に伝え、被災地への思いを持ち続けること、出来ることを出来るだけでも行動をおこすことを忘れず継続してもらうことを伝える必要があると感じました。

[自治労長野県職員労組木曾支部・青柳 建一]



今回、はじめてボランティア活動に参加させていただきました。

天候が悪く作業が中止になったこともあり、ボランティアをして「地域の役に立てた」という実感はなく、被災地の状況を目で見て、ボランティアセンター方々のお話を生で伺い「いろいろなことを感じ、考える機会を与えていただいた」という感想です。

感じたことを職場や家庭等で伝えていくことが、今の自分にできることなのかなと思っています。

最後になりましたが、貴重な体験をさせていただいたことに感謝申し上げます。